



ドイツでも、コロナでごみ増加

ドイツは人口8300万人。ドイツ連邦統計庁によると2018年、ドイツの一般家庭から出たごみは総計3780万トン、一人当たり455キロだった。これはいわゆる普通のごみ、生ごみ、リサイクルごみ、粗大ごみを含めたものである。

ドイツでは家庭から出るごみは、下記の5つに分類する。

①ビン ②紙 ③容器包装類（プラスチック類、缶、牛乳パックなど）④生ごみ
⑤家庭ごみ（上の4つ以外のごみ）

③はヨーグルトやジュースのパック、ペンキの容器など商品の包装廃棄物で、製造者責任で処理されるため、ゲルベザック（黄色い袋）と呼ばれる指定の袋に入れる。

⑤の家庭ごみとは、①～④以外に家庭から出るごみで、焼却したり、分別して生物分解や埋め立てたりする。

①～③は無料、④と⑤は有料である。

①は街角のコンテナーを持っていく。②～⑤は毎週または隔週で自宅前に出す。庭木や粗大ごみ、電化製品、自転車など大きなものは清掃公社に無料で持ち込む。しかし今春は新型コロナウイルスの影響により他人と接触する機会となる持ち込みが制限され、ハノーファーで6月20日から再開されたときは長蛇の列ができた。

前述の455キロは①～⑤をすべて含

む。事業者や工事なども含めるとドイツ全体で出たごみの総計は2018年、4億1720万トンだったので、一般家庭からのごみは1割にも満たないことがわかる。ちなみに環境省によると、日本では2016年度1人あたり年間340キロと、ドイツよりも少なかった。

ごみ処理は清掃公社が民間会社に委託され、独立採算で行われる。費用は量だけでなく、回収頻度や一軒家が集合住宅によって変わる。また自治体によって異なり、1世帯あたり年間平均150ユーロ（1万8000円）から350ユーロ（4万2000円）ぐらいと幅がある。

コロナにより、ドイツでは3月半ばから1ヶ月ほど外食が禁止されていた。食事の持ち帰りが増え、規制が徐々に解除されている現在でもレストランやカフェでは連絡先を書かなければならぬ。隣席と間隔を取ることが義務付けられているが、感染を恐れて持ち帰りにいる人は少なくない。

③は2018年ひとりあたり68キロだったが、③を処理するグリューネ・punktのデュアルシステム社によると現在、包装廃棄物は約1割増しとなり、「リサイクルに尽力してきたが、石油価格の下落とコロナにより、リサイクルが脅かされている」と警告する。

ドイツ環境支援協会（DHU）は「コロナのため衛生面に配慮するからと



私が住んでいる集合住宅の裏庭に置いてあるコンテナー。左の2つが普通のごみ（家庭ごみ）、その隣の茶色いのが生ごみ用です。明がごみを入れているのが古紙用。

いって、リユースカップやリユース容器を否定してはならない。洗って使える容器の導入割合を決めるべきだ」と強制力のある施策を要求する。

家庭ごみも増えており、例えばベルリンではすでに8%増しとなっている。地方自治体系企業連盟（VKU）は、今年は一般世帯からのごみが大幅に増加する一方、事業者からのごみは1割ほど減ると予測している。

ちなみに7月から今年末まで、消費税が19%から16%に、食品や書籍などの軽減税率は7%から5%に引き下げられた。もともとドイツは内税表示であり、今回の減税は事業者支援のためなので、販売価格に反映させる必要はないが、大手スーパーなどは価格を下げ、安さをアピールしている。

ごみかんドイツ特派員 田口 理穂

AKIRA の 成長記録

明は6月から1日おきに学校に行っていましたが、7月16日から6週間の夏休みに入りました。クラス替えはありませんが、3年間お世話になった担任の先生二人とはお別れなので、公園でお別れ会をしました。

先生は各生徒に小さなサボテンを渡し、ミナは「説得力」、ハナは「思いやり」、コーチャンは「指導力」、ウザイは「人生の喜び」などその子の特徴を伝えました。明は「好奇心」で、いろんな世界を見て知識を吸収しているとほめられました。先生は生徒をよく見ていて、よいところを伸ばそうしてくれている。どの子にどの形のサボテンがぴったり



か考え、心を碎いてくれたのだと感激しました。「厳しい状況でもサボテンのように、生き抜いてほしい。そして世話を簡単だから、卒業（13年生）までしっかり育ててね」と言われ、大事に持ち帰りました。明は「これまでの学校生活7年間でいろんなことを学んだ。これから的人生で、こんなに学ぶことはもうないだろう」とじじくさいことを言っています。

それにしても夏休み、何をしようかな。毎年恒例の日本とギリシアへの里帰りは、コロナのため取りやめました。ゲーテのファウストの舞台となったプロッケン山でハイキングするとか、北海そばの友達のうちに遊びに行くとか、近場を満喫しようと思っています。